

人と動物に愛限りなく

ボンフォードさん死去

西宮在住の
ドイツ人女性



人と動物への優しさを貫いたありし日のロートラウト
・ボンフォードさん

戦後40年ボランティアー人生

西宮市北山町で阪神動物救護センターを開くなど、戦後四十年間、傷ついた大猫を引き取り続けたドイツ人女性、ロートラウト・ボンフォードさん(60)が、がんで亡くなった。持ち込まれる大猫を安楽死させることから、一部で白眼視されることもあったが、神戸ドイツ人学校の創設にも携わった敬けんなクリスチャン。終戦時の旧満州では身をしていて日本の婦女を守り、戦後も身寄りのないお年寄りに自宅を開放するなど、その人柄を知る人たちは「人と動物に惜しみない愛をさげた人生だった」と、死を惜しんでいる。

西ドイツに生まれ、二十五歳の時、あこがれの東洋に。スマトラ、中国で過ごし、英人人と結婚したが、戦雲急を告げ、同盟国の日本に緊急避難した。しかし、スパイと間違われ四カ月間留置された。やっこの思いでドイツに帰国したが、既に英人人の妻。数年後、追われるごとく出国、満州で終戦を迎え、なだれ込むソ連兵に日本人の村落は修羅場と化した。何度もし連兵とやり取りし、婦女を守った。

二十一年、尼崎に定住。身につけていた製本技術で食いつなぎ、行き倒れの人などを自宅で介抱し、何年にもわたり母子を預かったことも。だが、ドイツで、満州で、地獄を見てきたボンフォードさんの優しさは、人間にとどまらなかった。やがて、捨て大、捨て猫を育て始め、五十四年まで神戸ドイツ人学校の

体育とドイツ語の教師として活躍するとともに、あわれな動物に手を差し伸べた。三十六年にはより広い土地

捨て犬、猫を保護 老人らに自宅開放

み、自宅は超満員。悩み抜いた末「現状では仕方がない」と、ヨーロッパなどで行われている薬による動物の安楽死に踏み切る決意をした。本来ならば飼いが背負うべき「十字架」を自らに科したのだ。

「物のあわれを知る日本人が目先の動物の苦しみをなげ和らげてやれないのか」。

四十年間にボンフォードさんが助けた動物は、数十万頭にもなる。何割かは天寿を全うしたが、その多くは無責任な飼主のために苦痛を強いられた生き物たちだ。ボンフォードさんは今年七月、すい臓がんで倒れ、激痛の日々が続いた。しかし、ついに「痛い」という言葉を一度も口にせず、ただただただで二十六日朝、亡くなった。

医師団は、ボンフォードさんのすさまじいばかりの意志に驚き、彼女を知る人だれもが「命の尊厳を教えられた」という。

を求めて西宮へ。しかし、高度成長期のペットブームは、半面でさまざまな悲劇を生み、

葬儀は二十九日午前十時半から、六甲カトリック教会(神戸市灘区赤松町)で。